

新型コロナウイルスの流行に関連した県境をまたぐ移動自粛要請が全面解除になって20日余り。後部座席のガラスに「おうちマーク」と並んでわざわざ「群馬県在住」とステッカーを添付して走っていた新潟ナンバーの車などはもう見当たらなくなる。それにしても日本人は言われたことはよく守る。せきエチケツトや30秒の手洗いも定着してきたし、大声で話す人はもともと少ない。ソーシャルディスタンスをしっかりと確保して並んでいた。握手もそんなにしないが、ハグは生活習慣にない。靴を脱いで家にかかる生活様式は家の中に



寄稿

群馬県建設業協会 会長 青柳 剛

疫病対策の「見える化」

ウイルスを持ち込みにくく、えいていたことが思い起こす動きに、「そうはいい。もっと言えばふすまや障子、欄間の日本家屋は換気とついていたが畳のモジュールに合わせて自由自在になる。「はなれつながら」日本のやわらかい環境が住環境とともに育ってきた国民性とも言える。それでも2か月以上地方から感染者がほとんど出なかつた。下がり続けるのが当たりのような暗い雰囲気とする動きに、「そうはならないぞ」といった気持ちを含めて「中身が問われる時代」のことを言っていた。

誰もが感染症にかかる可能性のある当事者感覚を経験した後にやってくる時代は違つ、何もしいでずると元には戻らない。ペスト、スペイン風邪などの疫病対策とともに都市デザインまで変わってきた。緊急事態宣言期間中の重苦しい状況には誰も戻りたくない。毎日数多く出入りする作業員の中から「発熱者が出た!」といった情報が入る度に、ピリピリした雰囲気を感じた。企業でも経験していた。

工事現場は密になりにくいとはいえ、朝礼のソーシャルディスタンスや休憩所の時間差利用、通勤時の車利用時の換気要請など建設現場なりの対策が挙げられる。政府の動きと連動して2月の末から記録し続けてきた群馬建設協会の感染症対策のタイムラインは終わりそうもない。結果がすぐ出る自然災害と感染症対策はいつまでたっても当事者意識が続くことの差であり、元に戻るどころか、長引く時間が業界そのものを変えていく力になる。

県境をまたぐ移動が解禁になって本格的に人が動き出した。県内移動だけだった期間と比べ車と人の数が違つ。温泉地も人があふれ出している。中でも近くの道の駅、例年の100%をあっという間に超えた入り込み客だそう。車移動で平面駐車といった手軽さもあるが、従業員全員のマスク着用はもちろん、電動のアルコール消毒の設置やテラス席での食事といった安心感が人を呼んでいる。

建設業の「中身が問われる時代」は「生産性の向上」と「働き方改革」そのものだった。生産性の2割アップのためのi-Constructionが広がらだし、週休2日制も形になってきた。建設キャリアアップシステム(CCUS)はそれこそ技能労働者のキャリアパスの身を浮き彫りにする。100年、いや200年に1回と言われる今回の疫病が与える影響はあまりにも大きい。「疫病対策の見える化」が企業の将来性を左右する。日本人の国民性を裏返してみれば、今度は組織の内外から厳しく「中身が問われる時代」がやってきたと言えよう。